

第1436回（9月12日）

山村への新来と定着

—— 桧原村調査報告 ——

石原豊美

農山村をめぐる居住のあり方について考えるとき、大きく分けて農家成員、農家出身他出者、そして都市から農山村への新来者といった人たちが家や職業やライフスタイルをどう守り、選択していくかという課題と関連してそれぞれに異なる立場から生活を繰り広げてきたことに気づかされる。このうち第3の層、すなわち都市部から農山村への新来者については、新しい生活スタイルの実践者として注目され、ここ数年、マスコミなどによる報道が目につくようになってきているところである。しかしながら、そうした情報はしばしば断片的で一過的なものにとどまりがちであり、新来という現象が、どういった社会的層によって担われているのか、そうした人たちが受け入れる地域社会にどのようなインパクトを与えうるものであるかについて十分に示られてはいない。

昭和63年から平成1年にかけて都下の過疎山村桧原村で行なった調査（継続中）から、当面次のようなことを指摘できる。すなわち、新来者の受け皿としてのこの村の特徴は、都内にあって都心から近いと同時に自然環境に恵まれている、東京都西域の市郡部へは通勤可能である、人口流出が続いており、空き家や管理放棄山林が発生しているなど土地・家屋の売買が進む条件がある、といった点で新来者に好意的なものである。が、一方で冬の気候が厳しい、平坦地はほとんどなく新規に宅地を求める場合には傾斜地を造成する必要がある、その際に水道や道路などの生活設備も整えなければならない、空き家の長期間賃貸は所有者が好まない、定住することによって自治会組織に組み込まれ、種々の義務負担

を期待されるなど、この村に新たに住むことをそう容易ではなくしている条件も多くある。とはいえ、今日までのところこの村への新来を希望する人はきわめて多く、また投機目的の土地購入とも相まって土地売買市場は圧倒的な需要超過である。

流入定住世帯についてしてみると、人口流出の激しかった集落を中心に数十世帯が入ってきており、その大半は都内市郡部からである。世代的には30代以下の世帯主をもつ世帯と60歳以上の世帯主をもつ世帯に2分されるが、全体に小家族が多く、また過半数が単身世帯である。流入動機としては自然のゆたかなすぐれた環境を求めてきたことのほか、都心の住宅事情が関係している。

別荘利用者については村内の1集落の例をみるかぎり、地元住民との関わりをあまり持たないまま、多様な年齢層の人たちが家族で散策を楽しんだり従業員の慰安に利用するなどさまざまな利用の仕方をしているようである。全員が土地を購入しているが、これはかつてこの集落からの拳家流出者が転出時の資金獲得のために売却した土地である。

村への定着に成功しているときみなされる新来者の事例を検討すると、定着のためには地元住民とのインフォーマルな関係を幾重かに形成していくことが重要な鍵となっており、そうした関係を通じて村で生活したり週末を過ごすのに必要な種々の生活技術を伝授してもらったり資源を共に利用することへのわだかまりがなくなっていくのではないかと考えられる。また集落レベルでの関係もさることながら、現在では村全体として新来者にどう対処していくのかが問われる段階にきている。